

じゃないと。それは特に民間は自分たちのもっているノウハウを、対価としてお客様にいただいたりしてますから、そのソフトは非常に貴重なものです。自分たちが一生懸命開発したプログラムだったり、ノウハウだったりしますが、そんなもん隠している場合じゃない。お互いが隠しているうちに大変なことになるんだぞと。僕らまだまだ世の中でやっていることは、日本全体では米粒みたいに小さなものです。米粒同士がお互い隠してたっしょうがないんで、そのためには一番いいのは、一緒に仕事をすることだと思います。

鈴木：今日はお忙しいところをそれぞれパネリストの先生方、環境教育への期待ということで、大変貴重なご意見を頂戴したわけです。環境教育は、21世紀の教育そのものであると大きく捉えるべきだと考えておまして、そういう意味合いのことをそれぞれのパネリストの方もおっしゃっていただいたんで益々意を強くしたわけです。本当は10年を迎える日本環境教育学会がこれから何をやったらいいのかということ、それぞれに厳しいご意見を頂戴しなかったんですけども時間がなくなりましたんで、またあとでそっと厳しいご意見を頂戴できればと思います。

環境教育学会ができて、先ほど会員でもある佐藤さんが、だんだん少し変わってきてるねというご意見がありましたが、21世紀の教育像をお互いに作り上げていくという具体的な実践活動をこれからも続けていく、そういう学会であると僕自身は考えております。どうぞ今後ともご支援をよろしくお願いたします。パネリストの先生方どうもありがとうございました。会場みなさんもどうもありがとうございました。

第3部実践報告

「環境教育の実践—地域と学校の連携—」

飯沼：みなさんこんにちは。第3部では、環境教育の実践のお話を進めていきたい思います。

環境教育というのはいろいろな関わりとか連携で進めていくことが大切だと言われています。一番関わりにくいといわれている学校。そこに視点を絞っ

て事例を報告していただこうと思ってます。素晴らしい実践事例というものが全国にあります。その3つの事例を学校ともう一名、地域やNGOの方、二人セットになって発表していただきます。そして後半はみなさんと関わりながら、「地域」というところに焦点を絞り、どのようにして環境教育を進めていくか、関わりを創っていくか、どんな関わりがいいのかを考えていきたいと思います。まずは埼玉県のピオトープの例からお願いします。

寺田：こんにちは。ピオトープはバイオという生き物を表す言葉と、トープという空間を表す言葉がくっついて、生物が棲んでいる場所という意味だそうです。その地域に本来棲息している生き物が気持ちよく棲めるような場所がピオトープの意味になると思うんです。そういうものを学校に造った実践を発表します。

<以下スライド*を見ながら>

- *前任校の大袋東小学校とピオトープの構成要素。
- *看板。今こんな花が見えてるよって常時取り替えるような仕組みに作ったものです。
- *池と観察台の石です。
- *池の出口に小川のようなものがあつたが、その地面がぬかるので、切り倒した木を2本つけて、インターロッキングブロックを並べたりして。ブロックは市の清掃工場からもらってきて、それがどういうふうにできたのかということも勉強しながらやりました。



*木組みと呼んで、太目の枯れ枝を集めて積み上げています。腐って、きのこが生えたり、いろんな生き物が棲むようになります。

*枯葉を集めて積み上げている。落ち葉のストック

ヤードと呼んでいます。カブトムシとかそういう虫が来るといいねと。

*シタケのいらなくなったホダ木をもらってきて積んであるんですが、クワガタの幼虫なんか果食ってくれればいいなど。

*石を積み上げた石組みですが、雨が降ったあと、石だとすぐ乾くし、カナヘビ、トカゲなんか好んでここに棲みます。

*魔法の木と言って、プラスチックと木材のいらなくなったものを50%ずつ混ぜて練って固めて板にしたものですが、それで何か工作を作ってみよう、

いろんな枯葉を詰めた部屋とか、枯れ枝を詰めた部屋とか、毛糸の玉を詰めた部屋とかを作って、これをピオトープの中に置いて、いろんな生き物が棲んでくれるといいねと。子どもたちはこれを生き物の

コンビニエンスマンションと名前を付けたんです。

*砂漠をみどりにとか、環境に関わるような道徳の教材として活用しています。

*図工、その他音楽、理科生活科はもちろん、給食、クラブ、委員会でも活用します。

*からすの巣があったんですね。

*委員会の子どもたちは、3、4人ずつに分かれていて、ピオトープ朝一周して、こんなもの見つけたよっていうのを記録します。

*見つけたものがあると、休み時間にきた子たちにもわかるように立て札を立てる。お昼の放送でもお知らせしています。

*もともとうちの学校は林があったんです。そこをさらに良いものにしようということで、工事が終わったばかりの写真です。平成5年3月ふれあいサンクチュアリ整備事業という県と市のほうで予算を半分ずつ出して、確か200万くらい掛けてやってくれた工事なんです。生態系保護協会による設計・施行だったというのは、最初は知りませんでした。2月か3月ころになんか工事が入るよ、危ないからこっちは来ちゃだめだよっていう連絡があって、それだけだった。それから2年。どうなっていったかということ。池の周り、上手の部分がすっかり踏み固められて草も生えていません。前は遊び場だったので、サンクチュアリになった後も子どもたちにとってはただの遊び場だったんです。

*平成7年の3月から学校として環境教育を重点的にやっという職員の間で共通理解があって、生

態系保護協会の方から自然についての見方の指導をしていただき、全校の生徒たちにもう一回このサンクチュアリを本来の姿に戻すような作業をやってもらおうという話をしてもらった時です。

*話だけじゃ子どもたち分かりませんから、じゃあ君は虫になったつもり、君は葉っぱのつもりと、ちょっと楽しくゲームでやっているところです。

*実際の作業で、踏み固めてしまったところを子どもたちがシャベルで耕しているところです。

*土を耕す作業が大体終わったところで、ロープの中と外と違うのがお分かりになると思います。

*いつも開放していて誰でも入れる場所ですから、枯れ枝を積んでしまおうということでロープ沿いに市の公園の伐採した枝をもらってきてそれを積んでいるところです。

*枯れ枝が朽ちて土に戻る1、2年の間にはいい状況になるんじゃないかということです。このへんのノウハウは、すべて生態系保護協会のほうから指導を受けて一緒にやってきました。

*1年後の様子で、草が生えてきているのがお分かりでしょうか。それからさらに2、3年たっていますから、今はもう鬱蒼としていて、かなり本来の自然に近い形になってきていますが、実は生えている植物を見ると外来種が多かったり、本当の越谷の自然というにはまだまだというところです。

そして平成8年以降、毎年入学してくる1年生に、ここまでが去年までのピオトープだったけど、今度みんなでここをピオトープにしてね、と少しずつ広げる活動をしています。〈スライド終り〉



そこで成果と問題点をまとめてみます。第一に、環境に対する児童・職員の意識が高まりました。自然に対する見方を高めていく活動をするのが環境

教育では大事なという、一番大事なところをやらせていただき、そこから広がっていく形をとれたのととてもよかったです。

二点目としては、ピオトープの管理のあり方について基本的なことが学べたということ。一般のピオトープは、一応完成型になって後は管理という形になると思うのですが、学校ピオトープの場合は完成はなくて常に進歩していく、広げていく、ネットワーク化していくという考え方をご指導いただきました。

三点目は、かなり先進的な取り組みをさせていただいたので、いろんなところから見学に来ていただいたり、マスコミの取材がありまして、広くネットワーク化ができました。その人たちから、いろいろアイデアもいただいて、環境教育がすごく高まったと思いました。

ただ問題点としては、生態系保護協会は、学校の現場よりもずっと自然に対する考え方が高いので、先生方は、言われたとおりの感じになってしまっていて、人の手を入れないほうが良いというのを、自然のまま放置したほうが良いんだとか、あるいは踏み固めないために、学習で活用する時にも入っちゃいけないとか、ちょっと勘違いが生じました。それは何回か話し合う中で段々解消はしていったんですが。

それから、活用してみてここはこうした方が良いと感じるところは、保護協会の方にもお話ししていました。

キーポイントとしては、職員がピオトープづくりに関わることで、子どもたちの意欲を高めることにつながるなと思ったのがまず一点。もう一点は、学校とNGOと行政のバランスというか歩み寄りの中でやっていくことが大事なのかなと考えています。以上です。

田邊：日本生態系協会の田邊と申します。学校と地域の連携ということを考える中で、ピオトープをテーマにあげた時に考えるのは、やはりせえので立ち上げる難しさということが上げられると思います。当然先生の理解、つまり全先生が学校ピオトープというものの価値を理解してくれること。それから地域の理解、PTAの理解、行政の理解、そして子どもたちの理解、こういったいろんな理解があって初

めて学校ピオトープができて、そして持続していく。これがないとなかなか持続までは難しいと思いますね。

私ども自然保護団体、NGOという立場は、比較的自由に動けるというメリットがあります。どこにも束縛をされずに、自由に展開できる。教育委員会等に働きかけをしたり、あるいは学校がなかなかできないところで、地域に対して働きかける、そういった接着剤として活動していくということができません。

今の事例は、埼玉県生態系保護協会という私が以前の場所での取り組みとして紹介をしました。10年前から埼玉県において、学校ピオトープを進めようということで実際に活動を始めてきました。ドイツに行きましてそういった事例を見るにつけ、これを起爆剤として環境教育を進められないかということで、行政に対してまず働きかけをしていった。当然予算、態勢、そしてカリキュラム、その三つが揃って環境教育としての学校ピオトープも効果的に、効率的に進めていけるんじゃないか。行政から入っていったため、現場の先生方にまで理解が通じないものができてしまって、うまく活用できなかった失敗例もありました。けれども、数年後には現場の先生とも心と心で一緒にやってきているところです。

飯沼：学校にどんどん関わっていきこうというので、なかなか難しいところもあったみたいですが、最近子どもや先生と考えながらピオトープをつくるという活動もされているそうですね。

田邊：そうですね。今は設計段階から子どもたちに関わらせて進めていくということで環境教育をさせていただいています。

飯沼：一つのことに関わるっていうのを10年続けていけば、どんどん関わりが深くなって、いいことができるのではないかなと思います。それでは次は横浜の身近な環境の例でお願いします。

和泉：横浜の教員の和泉です。横浜は比較的市民活動グループの多いところで、200以上のNGOがあると思います。鶴見川の流域だけでも50ぐらいのいろいろな川に関わる市民グループが活動しています。もともと私も生物が好きだったので、地域の人たちと10年以上前からボランティアで川の観察会をやっていました。

95年ころに、自分たちの学校でも環境教育にちゃんと取り組んでいこうと、少しずつ態勢が整ってきまして、一回市民グループの方たちと話し合いをしたら良いんじゃないかと考えました。学校の体育館を使って、5月にシンポジウムをやろうと。その時は、7団体の方が来てくれました。まず学校の方で今環境教育がどうなっているか、現実的にはまったくできてないという話をし、そこでいろいろな団体が自分たちは森と関わってどんなことをしてるのか、狸の調査をしているとか、川の水質調査や川の文化をやっているとか、それからごみの問題を考えているというようなことを話してもらいました。そんなことから、川を考える会の人たちと子どものクラブと一緒に定期的に水質調査とか生き物調査を始めるきっかけにもなりました。



第1回 横浜・環境教育シンポジウム

そうこうするうちに、学校の方でも、平成7年度から環境教育を重点化して取り組もうということになりました。1回目、5月にやったときはまだ70人ほどでしたが、もうちょっと助成金をもらってできないかということで、その秋、第2回目のシンポジウムをやることになりました。そのころはまだ実行委員会という形で、まったくの市民のNGOと教員が数人。この教員がちょっと普通よりは外れているとか、それぞれ土日にはふれあい村でなんかをやっているとか、観察会をやっているとか、子供会議を主催してるとかいうような教員がたまたま多かったんですが、いもづるネットワークとか、口コミで10数団体の人が来てくれました。まずいろんなグループがあるんだということと、学校に協力してくれる団体にはお話を聞こうという教員側の要求がありました。そこで市も教職員組合の方も協

力してくれまして、結構な人数が集まりました。それ以来いろんな形で、授業公開したり、NGOの方に来ていただいて授業をやってるんです。

例えば、6年生の教材に「人類は滅びるか」というような説明文があつて、これはトキみたいに絶滅寸前の生き物もあれば、ハチドリみたいに環境に適している生き物もいますよ。さて人間はどうでしょうかかねと。筆者は特に絶滅するともしないとも言っていないんですけども、子どもは自分たちで取材して、人類は絶滅するのか、しないのか、二つに分かれて調べる。一週間後に討論会をやろうという計画でした。人類は滅びないというほうでは、ゴキブリを調べた子どももいました。環境を良くするいい人間もいるだろう、汚い川にも鮎が戻ってきたから、そういう人たちを呼ぼうってことで来てもらって。いややっぱりトキみたいに、いなくなっちゃう、人類滅亡するよ、蜚がそうだからって、蜚の会の人に取材に行ったり。

ダイオキシンのことが問題になってきたんで、ダイオキシンの事を調べる。ゴミの会に連絡して初めてダイオキシンのデータをいただくことができて、討論会の時に来ていただいたりしました。そうしますと一言一語リアリティーのある事実を市民グループの方から教えていただけるんで、子どもも興味を持つ。

「太陽」というテーマで、ローランド・モリーナ会の人にお話を伺うと、紫外線というのはちょっと問題があるよということで。その時はたまたま参観日でしたが、お母さんたちもびっくりしていた。我々も非常に参考になりました。

シンポジウムをやつて分かってきたことは、NGOと学校は協力することができるということ。そのあとNGOの方々が、横浜環境教育推進協議会を作つて下さいまして、共同で子供向けに環境のプログラムを開発することができました。この時に教員だけでは情報が足りないし、NGOの方だけでもおっしゃることが難しい。教員がそこに入りまして子ども向きの資料にしてもらう。これらは横浜の全部の学校に一冊ずつ配られるように行政の方で印刷代は負担をしてくれました。

NGOとの関係が良くなってきましたと、段々認知も高まりますし、学校教育とリンクできるんだということが分かってきます。我々の目と違う新鮮なも

のがあります。学校のカリキュラムとの整合性を我々も考えながら協力していくという方向になってきています。最近では5回目を迎えて、子ども会議と一緒にワークショップのようなものを開いているところです。



「人類は滅びるか」6年生の討論会

神山：ローランド・モリーナ会の神山と申します。私たちはオゾン層問題に取り組んでいまして。オゾン層問題を一番初めに指摘してノーベル賞を受賞したローランドという学者と、モリーナという学者がいるんですけど、そこから名前を取って横浜と神奈川県を主にして活動している団体です。いくつもの団体が連携して、ストップフロン全国連絡会という全国組織の活動団体になっています。

一方でフロン回収処理するというのを法律として作って下さいと全国で呼びかけて署名活動やロビーイングをやりましたが、段々私たちのやっていることは、一般化されるんだろうかと危惧し始めたんですね。みんなに分かってもらうことにも、力を入れていかなくてはという事を言い始めまして、そのためにはどういったことをやっていけば良いのかという事を考えました。

外に出るときに、紫外線を必要以上に浴びることは危険なんだよということを知ってもらいたいため国会の前でパレードを試みたり、CDを出したり、絵本を作りました。これは日本語と英語と両方で書いて、いろいろな国で使えるものにしました。大阪なんですけど、プールの上にテントを張って日光を避けようとか。子どもたちも帽子を被ったりサングラスをしたりとか。これは若干パフォーマンス的なところも強いんですが、ここは保育園の園長先生がとてもこの問題を意識して取り組まれたところで、現在

も続いています。

その他、私たちが主催したシンポジウムでファッションショーをやってみたり。川辺のイベントがあった時にもこのような帽子を被ったり、フェイスペイントとって、顔にちょっと絵を描いたり。基本的には紫外線を防御するということが目的にあるんですが、行列ができるようなとても大人気のイベントに毎回なってます。

学校と連携を取れるようになって何のメリットがあるかといえば、もともと分かりにくい問題を子どもたちに分かってもらい、お父さんお母さんに話してもらいたい。それによって一般に広がりを持たせたい。

当然地域を知るといこともメリットがあると思います。いくつかの市民団体が連携を取ることで、いろいろな角度から環境問題に迫れるというのがあるがたいし、逆に子どもたちにとってみれば、たとえば一つゴミ問題だけじゃなくて、その他にも川の問題にもつながっているよ、オゾン層の問題にもつながっているよというのを与えられる良い機会になっているのではないかと思います。

飯沼：どうもありがとうございました。やっぱり専門の人が学校に来て話してくれると、子どもたちの目も輝きます。先生が教育のプロだとしたら、NGOは、環境のプロだ。その二つが結びついて環境教育になるという関わりがあるのかなと思います。それでは次に愛知の城下町再生の例をお願いします。

寺本：愛知教育大学の寺本と申します。

<以下スライド*を見ながら>

*愛知県の三河地方にある小京都、西尾市人口10万人の中心市街地を擁する、その地区の小学校との連携の授業です。写真では素敵な街角が見られますけれども、一歩裏に入りますと悲惨な状況になっております。中心市街地の空洞化の様相です。

*昨年度、蔵に着目させる授業をおこないました。蔵は子どもたちにはほとんど目に入っておりませんでした。これは伝えていくには、学習しかないと思ひましてやりました。

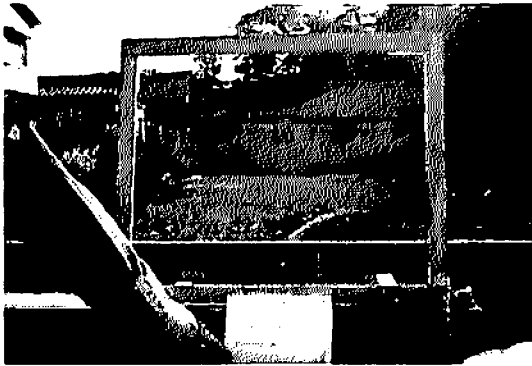
*スケッチさせる、観察を通して蔵の重要性について知らせることにしました。

*中に入って探検です。これによって蔵の持ち主との関わりが生まれました。

*街の方々にいろいろ教えてもらう学習。人を介して城下町を知るといことです。

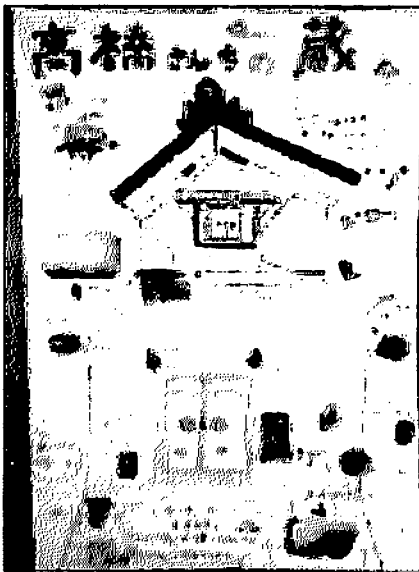
*親子で街探検をやって、街を撮影して優秀作品を町のギャラリーに飾るという試みを3年間もやっています。

*都市環境に気づかせるということで、子供街角美術展覧会と名付けまして、子どもたちに額縁だけを持たせて、街の中からユニークなものを切り取り、タイトルを付けさせてぶら下げるという、そういった額縁を掲げて3日間放置し



手作りの額縁から眺めた景観

てくるんですね。そうしますと街を行く人たちが、何だろうこれはということで、このフレームの中から見たランドスケープが一つの美術作品であるというやり方を取りました。



城下町に残る土蔵発見学習

*公園改造計画のようなプランニングもやるようにしました。

*蔵の中で、蔵改造ワークショップを市民60名の参加によってやった時の写真です。こうして市民の盛り上がりも今ようやく起こってきました。これは学校が街づくり機能の一端を持っているという意識で起したものですから、学校からの発信機能が非常に市民を触発していった、そういう成果でございます。

*カメラで、街の21世紀に残したい宝物ということで撮影してこさせると。

*価値の鑑定をブレンライティングなんかで行って、そういうことで学力にもなるようにやっているんです。

*それを作品化して市民ギャラリーで発表する。子どもが発表すると、その親が見に来ます。そのおじいさんおばあさんも見に来たり、3世代わつと参加してくれるんですね。子どもが動く、いかに街が動き出すかという事例になるかと思ひます。＜スライド終り＞

いよいよ学校が街づくりに乗り出す時代がきた。それで学校が動き出すことで他のセクター、例えばJICとか商工会とか市役所とかNPOとか、様々が学校を基軸に連携できるんじゃないかと思ひます。

今回総合的な学習が始まりますので、それでどのように子どもを動かしていくとどのような学力がつくのか。ここをうまく提示することによって学校の先生にも関心を持っていただき、これこそまさにねらいとする学習なんだということを訴えることにしております。つまり地域や学校にも、両者共に得るものがないと決して街づくりや環境学習が動いていかないと思ひますので、そういった面で今努力している最中でございます。

彦坂：こんにちは。彦坂でございます。街づくりというのは非常に難しい問題が多くて、そこに住んでいる商店主の方がそれぞれの別の価値観を持って商いをしている。けれども段々空洞化していく。その中でどう街を再生するかということにはいろんな切り口があると思ひます。その一つで今回寺本先生と関わる事ができたんです。そのおかげで子どもたちが街の中に来、それと同時に親が来、またおじいちゃんおばあちゃんが来るという形が少しでき始

めたかなという感じです。これをどう継続していくかというのがこれからの課題でもあるわけです。

今年の5月、バラサミットが行われました。全国からバラを作っている業者の方々の方が来るわけです。バラの花が西尾市の花でして、その中でどんなイベントで皆さんに本町を知ってもらうかということで、西尾市のバラを作っている方から、500本くらいのバラの花を協力していただいて、それを商店街の奥様方に自由にアレンジしていただいて店先に飾る。そして「本町とバラの花」というテーマで、小学校の皆さんに絵を描いていただく。その絵を本町の商店街の店先に飾り、表彰式をするというシステムを作ったんです。これは大変好評で、親子、おじいちゃんおばあちゃん、皆さん来てくださりまして、とても賑わいがあって良かったです。

あと、本町の商店は23店しかないんです。たいしたお店もないんですけど、でも皆さん確かに生きて生活してるんです。商っているんです。空洞化にはなっていないんですけども、それは高齢化が作った空洞化でもあるんです。この中にどう若者を取りこんでくるか。今まではお子さん。でももう少し上、中高生、大学生、こういう方々にどう本町、西尾市の中で活躍していただけるかというのが、これからの課題であるわけです。

飯沼：環境教育の中で「街づくり」というところは余り意識がない人もいらっしゃるかもしれないですけども、街に住んでいる人多いものですから、街というのは一番身近な環境ですよね。そこをどうしていくか。自分たちで作り変えていくというのは環境教育にとってすごく大きな視点かもしれないです。

埼玉の事例はNGOの方が一生懸命関わりだして、学校と関わりができて、環境教育をどんどん進めていった。横浜の事例は学校の先生方が頑張って出たって、地域の人たちと絡んでいった。最後のまちづくりの事例は、子どもたちが動いていったところから始まったというふうに見えるかもしれないですね。発表者の皆さんありがとうございます。これから、3つの事例を参考にしながら、皆様に参加して欲しいと思います。関わりとか連携、そのあたりをキーワードにしていきたいと思っています。

山田：ここから司会をする山田です。いわゆる学校

との間接的、直接的つながり、それに関しての問題点。飯沼さんも現場におられますので加わっていただいて、ぜひ一つフロアから意見を出して頂きたいと思います。

A（学生）：子どもたちとの話し合いの中で、これはちょっと意外だったな、気が付かなかったなという意見をお伺いしたいんですが。

山田：子どもたちから発信する意外な言葉、子どもたちから学んだことを。

寺田：ビオトープを造るときに、生態保護協会の方に来ていただいて、まず、なぜこういうことをするかというネイチャーゲーム的なガイダンスをしてから作業をしたんです。やった後子どもたちの反応を聞いたところ、非常に環境に対する、ビオトープに対する感覚が教師が思っていた以上に高まっていたんです。1、2年生の子でも。ここら辺はすごく意外でした。

子どもたちの関わりの中で、子どもは自然を知らないといっているけれども、すごく個人差が大きいというのを感じます。極端な例でいうと、イラガの幼虫を手のひらに乗せて可愛いという子もいれば、林間学校でちょっと湿地帯を歩いていて靴が汚れるというので、それをティッシュで拭きながら歩くような、自然と関われないような子もいたりして。でもそういう子でもビオトープでいろんな活動をやっていく中で、自然に対する関心・意欲が高まっていくというのはすごく感じたところです。

田邊：平成元年から私どもの会がスタートしてます。その頃、行政から予算を確保して場を造って、現場の先生方や子どもたちは余り関わらずに造ってしまった。その時はお互いにまったく理解がなく、造りあがった後も、とても本来の野生の生き物の棲息空間なんだよという感覚がなかった。

ドイツでは学校ビオトープを野外の実験室と呼びます。子どもたちが当事者になって、ある意味では責任者になって、積極的にそこに関わっていくということで、色々なことを学んでいきます。またそこに地域の方、あるいはPTAの方も関わりながら、共に学ぶ場であるということ。そういった意味では学校と地域の掛け橋にもなると言われます。先ほどのまちづくりの話にもありましたが、子どもたちが積極的に関わること、そしていろんな人と関わるのが、環境教育の教材としてふさわしいのかなとい

う気がします。

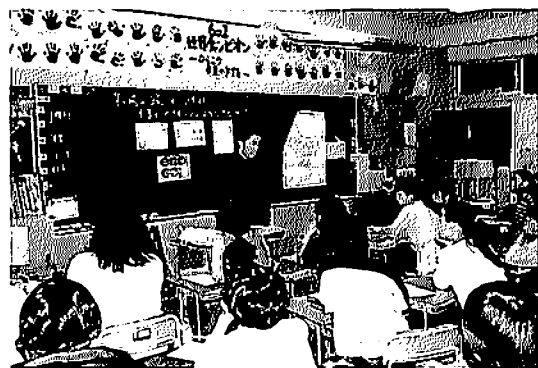
B (学生) : 今回地域と学校との連携ということですが、もう一つ環境教育の実践の場に家庭内教育があると思うんです。そこで家庭と学校または地域との連携についてお尋ねしたいんです。先生方の経験から、PTAや父母の方々の環境への意識・態度またはその環境教育に対する反響や積極性や協力がどのようなものなのか、またはどのように受けとめていらっしゃるのか、要望はないのかなどをお聞きしたい。

和泉 : 学校で重点的に研究している授業は教員同士で授業を見るのですが、3年ほど前から保護者に全部公開をしています。次はどういう授業をやりますという案内を出して、どうぞおいで下さいと。場合によってはマスコミの人とか塾の先生がくることもあります。基本的にすべてオープンということにしています。

それで保護者には、環境教育だよりというのを出しているんです。例えば神山さんがフロンのお話してくれるという時には、6年生の授業の時に、3年や4年のお母さんも来られると。その後、ポストイト方式で、簡単に意見や感想を書いてもらって、それを次の会の案内に載せて保護者に伝える。我々も参考にさせてもらう。

そういうことをやって、一番よかったのは、学校がオープンにしているという姿勢を保護者が評価してくれることです。学校が今どんなことをテーマにして子どもと一緒にやっているのかということがよく分かるということを良く聞きます。

これから指導要領も変わりますし、学校のオープン化というのは、一番大事な点ですから。文部省な



紫外線についての話を聴く子どもたち

んかも学校評議員制と言ってますけど、地域の方々に学校運営に協力してもらい意見を聞くというシステムを作ろうとしておりますので。ただ、アメリカのような、地域の人たちが学校を創るという意識は、地域の方々にも学校にもまだそれほどあるとは思われないうです。少しずつは変わっていくように思っています。

飯沼 : 私は小学校の教員をやっています。なかなか保護者の意識を変えていくというのは難しいと思うんですが、環境教育の活動を学校でやると、まず間違いなく子どもは親に話をします。それですごく感化される人もいますし、気にされない方もいます。人それぞれですが、やり続けることで少しずつ変わっていくということがあるんじゃないかと思えます。

それと難しいのは、環境教育の活動というのはなかなか学校カリキュラムの中にしっかり入っているものじゃない。その辺先生方は普段よりも他のことをきっちりやっついていかないといけない現状があると思えます。

あとは保護者会とかで、環境の話とか実はそれは子どもの将来につながっているんだというような話を、直接保護者の方に訴えることができる機会があると思えます。うちの保護者でそんな話ばかり2年間していたら、環境教育に目覚めてしまって、主婦だから平日も、環境教育で走り回って、大きな団体を作ってしまったような人もいます。先ほどの先生方の活動ではないですけども、言い続けること、やり続けること、関わり続けることが大切なんじゃないかなあと思えます。

山田 : 学校と家庭というのは問題にしだすと切りがありませんが、学校も開放的な意識改革をしなければいけないのは確かであるわけです。しかし、学校にはやはりはじめも必要だろうと思うんです。環境教育のしつけの部分なんかはきちんと家庭でやって欲しいし、学校では学校でやるべきこともあるし、総合的学習だけをやっているわけではないので、その枠の中でどんな壁があるのか、その壁をふまえてどんなふうに関わりをとつたらいいのかというようなご意見を出していただけたら嬉しいですが。

C : 私は日本環境クラブという環境問題のNGOをやっています。たまたま和泉先生の学校の、地球は絶滅するかしないかというあのディベートの授業を家

が近いものですから、大変興味深く聴かせていただいたんです。

僕は、小学校では環境問題というのは余り特別な問題として捉えないで、例えば食物と環境との関係ということを考えると、小学校にはほとんど給食がありますよね。和泉先生の小学校のあたりはまだ田んぼや畑があるんですが、それぞれ各小学校の給食がどういうルートで作られてるんだろうと。この梨はどういう人がどういう土のところで作っているんだとか。ピオトープを学校の中に造ることも面白いんですが、それはこの世界の中のほんの一つだという発想もあると思うんです。ですから世界を広く見ていく。それが集約されて食物の中にあるというような、そういう発想も大事なんじゃないかと僕は思っているんです。外へ出ながら子どもたちが実際労働とか、土とか水とか空気とかそういうものを見て味わっていくというのもこれからのまちづくりに影響を与えていく。それも環境教育のこれからのすごい面白い課題だと思いますがどうでしょう。

山田：給食から始まりまして、採って作って食べるとか、そのへんの重要性。それを食農教育と言われているわけですが、そういう実践例、それを地域その他とうまく連携してやっている事例その他ありましたらどうぞ出していただけたらと思います。

彦坂：給食とはちょっと離れますが、西尾市はお茶の産地でして、抹茶生産量80%以上のものをもっています。その中で私たち子どもの頃からですが、中学生になりますとお茶摘み体験をさせられるんです。これは1週間ほどですけれども、お茶畑に行って朝から4時までしっかりお茶摘み労働をするんです。中学校あたりですと進学問題が出てきますよね。体験することは良いかもしれないが、どんどんカリキュラムが詰んでくる中で、1週間お茶摘みをさせることは親からしてみたらとんでもないという話は実際あるんです。それによって日にちも短くなり、なくなっていく可能性もなきにしもあらずなんです。体験させることの難しさ、これは現場の方はきっとあるかと思えます。

山田：地域の産業、その体験の評価は学校教育の中で、なかなか時間的に無理だというのも結構あるわけですね。そのへんに対してご意見がございましたらどうぞ。

寺田：給食を視点にしてアプローチするというのは

すごく良いアイデアだと思います。レジメで見ていただくと、子どもエコクラブへ全校加盟とあって、その中に給食の方に目が向いていて、残菜がすごく多いねいうことをやっているグループもあります。それから給食の牛乳パックが、リサイクルに乗らないって前言われて、じゃあ表と裏のポリフィルムを刺がせば普通の紙と同じになるんだからというようなことをやっていたり。それからもちろんピオトープに関わって動物や植物と関わっているグループ。環境についての関心を高めてもらうようなポスター描いているグループ。64グループあって様々なことをしているんです。そういう活動をする意欲を高めるきっかけになったのがピオトープづくりだということで、今日はそこまでの発表でとどめました。

和泉： たまたま一昨年(2011年)の11月に、近くに農専地区がありますので、温室をみるという授業がありました。そこはトマトの水耕栽培をされていて、子どもたちがそれに対して議論をしました。あんなの自然じゃないんじゃないとか、エネルギーばっか使っていておかしいんじゃないかという意見が結構出ました。もっと畑で太陽を浴びて作るべきだという考えがあったんだと思います。その一方、いやあの時期に作っていると高く売れるから大事だとか、近くで作って近くで食べられるんだから、ガソリン使わないから良いんだよ。それからもう一つはまったく逆で、クリーンできれいに野菜が作れるから良いんじゃないか、肥料も使わなくて臭くないというようなことを3年生ですけど言っているわけですね。その先生はどちらが良いというよな判断をしていませんでした。いろいろな問題があると。結局大人でも解決できない問題がそこに横たわっているような気がします。

我々も環境教育のことをいろいろやってますと、良い面と悪い面が常に出てきますし、保護者もそういう産業に関わっている人もいるわけで、一概に良いとか言えない。子どもなりに問題を見つけてもらって、先生はそういう調べる活動に対してアドバイスする。

ただし給食というのは非常に良い教材になると思います。うちの学校では果物については比較的地域のものが給食に取り入れられて、栄養士さんがその時コメント入れてくれます。そういうようにだんだん小さなシステムで循環できるようなことがいい

と思います。

D：多摩ニュータウンで環境教育をやっているものです。小学校は非常にやりやすいと思うんです。僕も環境教育一応中学まで広げているんですけども、ほとんど参加される方は小学生です。中学になるとどうも勉強に偏重しちゃって、そういうことに興味がなくなってしまふ。小学校で感動してやっているのに、何で中学校はあんなに壊れちゃってるのという、そういう問題が非常にあります。

P T Aでも、たまたま僕が関わっている学校は、去年今年と東京都の環境教育のモデル校ということで、様々な取り組みしてるんですけども、実はやっているのは専科の先生と教頭校長だけ。なんか企画しても先生すら出てこない。P T Aは当然出てこない。子どもたちは、思春期の子ってのは、ほとんど親や先生と一緒に出てくるなんてことはやらない。そういう問題が非常に多いんですね。ですからせっかく小学校で高まったものが、中学へ連動していかない。中学へつなげていく、中学生と関わっていくなんか良いアイデアなり成功例などがあつたらお話ししていただければと思います。

山田：今の問題は非常に大きな問題だと思います。小学校の感動とか、小学校の環境教育は中学校でどの程度生きているのか。あるいは中学校においてこんな活動をしていたら非常に良いとか、そういう事例もありましたらぜひ紹介していただければと思います。

田邊：まさに学年があがっていくにしたがって、いかに環境教育をやっていくかというのは非常に大きな問題だと思います。これは日本だけじゃなくて、アメリカやドイツでも、学年が上がるに連れていろんなことに興味を持ち始めて、段々離れていってしまうという学会の報告もあります。

NGOの立場から考えますと、地域の中で活動する場がある。私どもの会では、小学校から関わっている子どももいますし、中学校あるいは高校からいろんな年齢層がいます。その中で継続的に関わっていける。継続的にフォローアップしていくことができる、そこがNGOならではのことなのかなという気がしています。地域の雑木林や、湿地・葦原とか、そういうところをフィールドとして、最初は保全作業から関わっていく。先生に連れられて子どもたちがそういうところで汗を流していく。やがては実際

にそこを取り巻く社会的な問題に気づきながら、高校大学などでさらにまちづくりの計画などについてまで広げていくと。そういうところで学校側も利用していただければと思います。

E：横浜で民間の環境保全団体に所属しております。非常に恐縮ですが、質問はお金の話です。民間の環境保全団体の運転資金は、どこも非常に苦勞しております。差し支えのないところでお話しいただければと思います。

神山：まったく私たちも同感で、特に地域から発展したNGOはお金がないというのがどこも共通した課題だと思うんです。私は東京都の職員でして、うちの団体も基本的には一人を除いては、みんなボランティアみたいな形でやっているのが現状です。当然NGOの方も、事業化できるような力をつけていかななくてはいけないと思いますが。

逆にお願いは、NGOをただで使うという考え方は、止めていただきたい。行政が特にそうですし、市民の方もそうです。人がある程度の時間を掛けて何かをやろうと思ったらお金が掛かるのは当然ですし、その辺は皆で変えていかななくてはならないなど。

それとこの前N P O法案が通りましたが、その時に全然手をつけられなかった、寄付金等を無税にするとか、税体系を変えていって、NGOにお金が集まるような社会の仕組みというのを作っていかなくてはいけないなと思います。

田邊：私どもの会、財団法人となっていますが、基本的には法人格をいただいているだけでして、民間の立場で、独立採算の中で活動している団体です。

埼玉県の予算で、学校ビオトープを造る事業が6年前スタートしました。県は今事業を止めてしまひまして、それぞれの意識ある市町村が予算化をしている。越谷もその一つです。それ以外の市町村においては学校がどうしても造りたい、あるいはP T Aの人がどうしても造りたいといっても、うちもお金出せませんし、どうするのか。結局、一つは助成金ですね。今いろいろな民間企業の助成金があるかと思っています。みどり基金とかいろいろな助成金用いてやっていく。

それから、海外の事例を見ていきますと、子どもが企業を廻りながらお金を集める。そこから学校ビオトープの活動がスタートしてくる。そこまで子どもたちが進んで積極的に取り組んでいる。環境教育

の最終的なゴールの一つは、環境のことを考えて社会的に活動できる人間、市民行動が取れる人材の育成というのがあると思います。そういったプロジェクトの中で、子どもたちが積極的に動くことで、企業とか、NGOあるいは地域の方が振り向いてくれる、お金も出してくれるということも、今後日本でも可能性が十分あるのかなという気はいたします。彦坂：本町の場合は商店街ですので、発展会という組織がありまして、年会費1店舗ずつ何千円という形で集めています。いろんな企画を立ていく上で、お互いが利用し合うという形でお願いしてきました。お金をもらうわけにはいかないし、お金を生み出さなきゃいけない。自分たちで、どうやってそのお金を工面するか、そのへんを考えないといけません。山田：資金面は非常に重要なことです。問題提起していただいてありがとうございます。

F（学生）： 僕も将来教員になりたいという希望もありますし、緑地の勉強をしているので、中学校の環境教育の場に携わるチャンスがあったんです。やってみたいこととか、大きくなればどんどん多様化してきますよね。自ら考え自ら行動できる人の育成ということで、学校側としてはなるべく多くのコースを用意してあげる。一校の中学校の例なんですけれど、年間で外部講師が延べ500人くらいかかるという話で。そうなった時専門的知識のある方とかNGOの方とかが、どれくらい対応していけるのかという疑問があるんです。

山田：今の問題は資金とか謝礼にもまた関わってくる非常に大きい問題ですが。

神山：将来タイミングの問題だと思うんです。そういう状況に向かっているとしたら、現在私どものほうでも、アルバイトやって生計を立ててる人とか、学生でこれから働き出そうというちょうど過程にある人とかが、そういう方向に向かえる。それを目指しながら、その人を育てることをしていけるのであれば、十分対応することは可能だと思うんです。

山田：まだご意見があると思いますけれども、そろそろ時間になりました。

結論の出ない問題ですけれども、このセッションは学校と地域というのがキーワードになっておりました。その間に地域・行政・市民いろいろありました。そこに資金面がからんでくるわけです。とにかくどこかに所属して、とりあえず余った時間をボラ

ンティアでももらいながら、将来的には予算化をお願いする。ボランティアでやった実績がありますと、市町村レベルで予算化してくれますし、中央官庁の方はそれをバックアップしていただきますと、資金面もなんとかなると思うんですね。とにかく最終的な資金がなければ活動は無理ですので、その辺も踏まえて金と物と人というものをうまく考えれば、地域の連携はこれから一つの方向が出てくるんじゃないかと思いますが、簡単に結果が出るものではないと思うんです。

小学校はやりやすいけれども中高はやりにくいというのは確かにそうであります。しかしNGOなり地域の活動の中で、リピーターのような形で出てきて、そして指導者になってということもあると思います。

まだご意見があると思いますけれども、これを機会に事務局その他に意見を出していただければと思います。今日はご協力ありがとうございました。



進士五十八(10周年記念シンポジウム実行委員長)

第1部から第3部まで、言葉は届いているかというところから課題を提起していただきまして、先ほどらいは、教育の実践、まだまだ小さい活動でありますけれども、地域に広がっていくという、一つの広がりを捉えたのではないかなというふうに思っております。環境教育という問題につきましては、これから21世紀に向かって基調的な問題になっていくのではないかということでもありますので、環境教育学会としては、さらに10年頑張っていかなければいけないのではないかというシンポジウムではなかったかと思っております。朝から大変ご苦勞様でした。どうもありがとうございました。